氏名（本籍）	大原　央聡
学位の種類	博士（芸術学）
学位記番号	博乙第 2687 号
学位授与年月	平成２６年　３月２５日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該
当審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	欧州の木彫表現における樹種とその造形的特徴に関する考察

主　　査	筑波大学教授	博士（芸術学）	中村義孝
副　　査	筑波大学教授	Dr. Phil.	長田年弘
副　　査	筑波大学教授		柴田良貴
副　　査	田園調布学園大学准教授	博士（芸術学）	中原篤徳

論文の内容の要旨

（目的）

本研究は古代から石の文化を持つ欧州において独自の発達を遂げた木彫について調査・研究を行っている。樹種とその硬軟による表現の関係を考察し、さらに日本の木彫と対比することにより、その造形的特質を明らかにする試みである。また、著者自身が、研究者・制作者として、木という素材による、欧州と日本の造形意識の融合を試み、現代における木彫表現について制作者の立場から実制作を通して、新しい造形的試みを推進することを目的としている。

（対象と方法）

先ず、欧州において、7 回にわたる現地調査を 8 年間にわたって行い、10 カ国、40 都市、65 以上の美術館、博物館、財団、施設、大学等で資料収集を行っている。特に木彫の材料となる木材の樹種と表現との関係に着目し現地調査等により可能な限り使用樹種の特定を行い、表現との関係を考察している。特にドイツ、イタリアを中心にスペイン、イギリス、フランスなどと日本の木彫表現を比較しその独自の表現と材種の硬軟による共通性を導き出すことを試みている。自身による実験制作においてもさまざまな硬度の樹種を意図的に使用し、考察を重ねている。

（結果）

作品の材料となる木材の樹種に着目して、制作者として実感を伴った木彫制作に対する研究がなされた。第 1 章ではドイツにおける木彫表現について、西洋シナノキ材を使用した、ティルマン・リーメンシュナイダー（Tilman Riemenschneider 1460～1531　ドイツ）をあげ、ヒノキ材を使用した日本の仏師である定朝（生年不明-1057）との比較を行い、多くの共通点を指摘している。ま

た、さまざまな樹種を用いて木彫表現を行った、エルンスト・バルラハ（Ernst Barlach 1870～1938 ドイツ）について、その表現と樹種の関係について考察を行っている。その他にもエヴァルド・マタレ（Ewald Mataré　1887～1965　ドイツ）など、多くの彫刻家を挙げ、その表現と材種の関係について言及している。第 2 章ではイタリアにおける木彫表現について、アルトゥーロ・マルティーニ（Arturo Martini 1889～1947 イタリア）、マリノ・マリーニ　(Marino Marini　1901～1980 イタリア)、ペリクレ・ファッツィーニ（Pericle Fazzini 1913-1987 イタリア）等の彫刻家を挙げ、石材等の素材から影響を受けた造形的特徴や形態観を指摘している。第 3 章では、そのほかの欧州における木彫表現について、針葉樹を使用した、グレゴリオ・フェルナンデス（Gregorio Fernandez 1576～1636　スペイン)、ニレ材等を使用した、ヘンリー・ムーア（Henry Moore 1898～1986　イギリス）などを挙げて、造形的特徴について言及している。第 4 章では欧州と日本の木彫の比較を比較し、造形上の特徴とその要因の解明を試みている。第 5 章では自己の制作を通した木彫表現の可能性について多くの実例から根拠を得た実践的な研究がされた。

（考察）

本研究では一見接点のない欧州と日本の木彫家を比較することにより、樹種から必然的に得られる造形的特徴を明らかにしている。両者の共通点について、使用する用材の選択が似通っていたのが大きな要因であるとし、木材の堅さ、比重差、割れや変形の違い、彫り味などの要因が表現形態に影響し、選択した用材の性質が似ていれば造形的共通点も必然的に現れると考察している。エルンスト・バルラハでは、材種と表現の関係に着目し意図的に材種を替えて制作を行った可能性について言及している。欧州で見られた特徴的な表現の一つである「求心的な形態観による表現」について、その根底には石材の文化やその造形手法との関係があること、そして硬質な材の使用を挙げている。また、それに対して日本での「面で囲む形態観による表現」については、軟質な良材の使用と鋸など道具を関連づけて論じている。特徴的な二つの表現について比較と融合を試み、そこから実制作を通して新たな表現の可能性を提示している

審査の結果の要旨

（批評）

これまで、欧州の彫刻はブロンズやテラコッタによる塑造、石彫が中心に紹介されてきたが、輸送等の関係上、日本国内ではあまり紹介されてこなかった欧州の木彫について、現地調査を丹念に繰り返し、多くの資料を得ている。資料的価値もさることながら、樹種と木彫表現との関係という新しい視点から欧州の木彫を総合的に究明し、その造形的特徴の一端を明らかにしていることについて評価することができる。また自身も木彫を制作する立場から実践的に新たな表現の可能性について言及し、制作者として実感を伴った樹種と表現の考察は、今後増加することが予測される制作に重心を置いた研究に対しても寄与することが期待できる。

平成 26 年 1 月 6 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、学力の確認を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。